

『批判の書』にみるアーホンドザーデの 新たな歴史学

塩 野 崎 信 也

はじめに

南東コーカサス、すなわち現在のアゼルバイジャン共和国に該当する地域は、1813年にガージャール朝イランからロシア帝国に割譲された。以降、南東コーカサスにおいては、イラン本国に先んじるような形で近代化が進展していくこととなった。この近代化にあたって重要な役割を果たした人物の1人が、ミールザー・ファトフアリー・アーホンドザーデ（Mirzā Fath ‘Alī Āḥ⁽¹⁾ondzāde, 1812-1878）である。まずは、先行研究や概説などに基づいて、彼の生涯や現代における評価を簡単にまとめよう [Рафили 1957; Гусейнов 1958: 162-295; Тагизаде 1991; Parsinejad 1988; Məmmədov 2006: 314-319; Elr: “Āḥ⁽¹⁾undzāde,” “Iranian identity, iv. 19th-20th century”; Ādamīyat 1349š: 109-136; 佐野1986: 13-17; 塩野崎 2017: 147-184; 塩野崎 2023]。

アーホンドザーデは、南東コーカサスの北西部に位置する町シェキ（Şəki⁽²⁾）で生まれた。父はイラン北西部アーザルバーイジャーン地方の出身、母はアフリカにルーツを持つ黒人であった。家庭の事情などでイランや南東コーカサスの各地を転々とする幼少期を送ったアーホンドザーデであるが、1832年にエリザヴェトポリ（Елизаветполь⁽³⁾）に移住したことが人生の大きな転機となった。この地で開明主義者ヴァーゼフ（Mirzə Şafi Vazeh, 1794-1852）と出会った彼は、その影響から「反ウラマー」思想に傾いていき、また西洋の学問に対する関心を抱くようになったのである。

1834年にティフリスに移住したアーホンドザーデは、この地でロシア語を迅速に習得し、同年11月にロシア軍司令部付の翻訳官助手となった。1846年に軍人として任官、ペルシア語やテュルク語といった東洋言語の翻訳を主たる任務とし、最終的に大佐にまで昇進した。ティフリスでは、この都市に滞在していたレールモントフ（1814-1841）やマルリーンスキー（1797-1837）をはじめと

するロシア人作家たちとも交流した。また、1848年には、ナーセル・アッ＝ディーン・シャー（r. 1848-1896）の戴冠式に列席するロシア使節団の一員としてテヘランに赴き、改革派で知られる宰相アミール・キャビール（Amīr-e Kabīr, 1807-1852）に面会している。

アーホンドザーデの本格的な執筆活動は、テュルク語による戯曲作品から始まった。1850年から1855年にかけて発表された6篇の戯曲は、本人によるロシア語訳がティフリスで発行されていたロシア語新聞『カフカース *Кавказ*』に掲載され、好評を博すこととなる。これらの作品は、英独仏をはじめとするヨーロッパ各国語、さらにはペルシア語にも翻訳された。そのため、彼の戯曲はイランでも広く読まれ、作品に含まれる痛烈な社会風刺を通じてイランの人々に大きな影響を与えることとなった。また、これらの戯曲で彼が用いた、民衆の口語を土台とした平易なテュルク語は、現代アゼルバイジャン語の土台となった。

その後、アーホンドザーデは、啓蒙活動に力を入れていくことになる。彼は、西洋の最先端の思想や学問を解説する作品をペルシア語やテュルク語で次々に執筆し、南東コーカサスやイランの人々に近代的な理性主義、批判精神、さらには民族主義を広めていった。その結果、アーホンドザーデは、アゼルバイジャン民族主義のみならず、イラン民族主義の最初期の唱道者とみなされている。

本稿で扱うのは、アーホンドザーデによる著作の1つ『批判の書 *Resāle-ye īrād*』である。ペルシア語で書かれた作品で、その内容は、ペルシア語年代記『ナーセルの清浄の園 *Rowzat al-ṣafā-ye Nāserī*』に対する批評である。アーホンドザーデは、この作品において、伝統的なペルシア語年代記に対する不満を表明し、歴史書の新たな形を提示した。彼の思想を読み解く上で重要であると同時に、ペルシア文芸史の観点からも注目すべき作品である。それは、『イラン百科事典』のガージャール朝期におけるペルシア語歴史叙述に関する項目で、執筆者のアマーナト氏がこの作品を「もしかするとペルシア語で書かれた最初の近代的な書評かもしれない」と評していることから窺える [EI: “Historiography, viii. Qajar Period”; cf. Amanat 2012: 315]。

『批判の書』に関しては、アーダミーヤト氏とパールスィーネジャード氏がそれぞれのアーホンドザーデに関する専論の中で、その要点を簡潔に紹介している [Ādamīyat 1349š: 241-244; Parsinejad 1988: 54-59]。しかし、作品の具体的な内容には、両氏ともにあまり踏み込んでいない。結果、アーホンドザーデ

がペルシア語の歴史叙述の何を批判し、その批判にあたってどのような論法を用い、さらには最終的に何を目指していたのか、いまひとつ分からないままになってしまっている。『批判の書』の影響関係を解明し、ペルシア文芸史におけるこの作品の正確な位置付けを確定するためには、アーホンドザーデが述べていることの要点や大意を把握するだけでは不十分であろう。そこで、本稿では、『批判の書』の内容や文章表現を詳細に検討することで、上述の諸点を解明し、今後のアーホンドザーデ研究に資する土台を形成することを目指す。

1. 『批判の書』と『ナーセルの清浄の園』

『批判の書』は、これまでに出版されたアーホンドザーデの全集などにアゼルバイジャン語訳が収録されてきた。その中でも最新のものは2005年に出版された3巻本の全集に収録されたもので、ラテン文字アゼルバイジャン語で読むことができる [Əsərləri L: II. 193-200]。これはソヴィエト時代に用いられていたキリル文字アゼルバイジャン語で書かれた翻訳を転刻したものである。そのキリル文字アゼルバイジャン語による全集は、1958年から1962年にかけて出版されたものなどがある。なお、このキリル文字の全集には、『批判の書』のペルシア語原文を手書きで写したのもも収録されている [Əsərləri K: II. 242-250, 374-392]。また、『批判の書』には、ロシア語訳も2種類存在している [Ахундов 1: 215-223; Ахундов 2: 209-216]。しかし、いずれのアゼルバイジャン語訳、ロシア語訳にも、省略されている箇所が少なからずあり、また難解な箇所を大胆に意識したりもしている。

パールスィーネジャード氏は、上述のキリル文字の全集を底本として、『批判の書』を英訳した [Parsinejad 1990: 39-46]。アゼルバイジャン語訳やロシア語訳と比べるとはるかに質の高い翻訳ではあるが、それでも杜撰に意識されている箇所などが少なからず含まれる。さらには、一部に翻訳されずに省略された箇所が見られるほか、極めて重大な誤訳も複数箇所で見られる。その原因の1つは、『ナーセルの清浄の園』の原文との対照が十分になされていない点にあると思われる。

このように、『批判の書』には翻訳がいくつかあるものの、いずれも不十分かつ不正確なものであり、アーホンドザーデの主張を正しく伝えるものとはなっていない。また、ペルシア語原文の校定にあたるものも存在しない。そこで本稿では、『批判の書』の内容の分析にあたって、基本的に手稿本を用いることとする。

『批判の書』の手稿本は、アゼルバイジャン国立科学アカデミーのM・フズーリー記念写本研究所 (M. Füzuli adına Əlyazmalar İnstitutu) に所蔵されている [s.v. 24]。所蔵番号は Apx. 2, Г-11/188, инв. 193であったが、近年⁽⁵⁾になって新たに番号が振りなおされ、現在では fond 2, s.v. 24となっている。大きさは18×22.5cm、18葉（そのうち6葉は白紙）の小さな手稿本であり、厚紙の表紙が付けられている [İbrahimov & Məmmədova 2012: 80]。以下、この手稿本を「s.v. 24手稿本」と呼称する。

s.v. 24手稿本は、アーホンドザーデの草稿を書写の専門家が清書したものと思われる。写字生の名は明らかではない。1葉目の表にアーホンドザーデの自筆で題名が書かれているほか、第5章でも言及するように、彼の自筆による加筆箇所がある。

『批判の書』の手稿本はもう1冊存在しており、こちらも上述の写本研究所に所蔵されている [s.v. 25]。所蔵番号は fond 2, s.v. 25、旧番号は Apx. 2, Г-19/420, инв. 606、大きさが28×22.5cm、12葉である [İbrahimov & Məmmədova 2012: 81]。この手稿本に言及しているのはロシア語訳の1つ [Ахундов 1: 321] のみであり、その他の全集や研究書には、この手稿本に関する情報が全くない。一方で、この手稿本は非常に重要である。と言うのも、この手稿本はアーホンドザーデによる自筆本であり、修正箇所や挿入箇所の多さから清書前の草稿にあたるものと考えられるからである。

本稿では、『批判の書』の日本語訳にあたって、s.v. 24手稿本を底本として利用した。s.v. 25手稿本は、必要に応じて参照している。また、各種の翻訳も参考にした。なお、s.v. 24手稿本には葉番号ではなく頁番号が付されているため、典拠情報を示す際にも頁番号を表記している。s.v. 25手稿本は、葉番号で示す。

さて、『批判の書』の執筆経緯について、アーホンドザーデは作品の冒頭箇所以下のように述べている。なお、以下、引用文中の〔 〕は筆者による補足、() は原語の表記を示すものとする。

〔ヒジュラ暦〕1279年の夏、私は3ヶ月間、ティフリスのコジョリ (Qūjūr) の避暑地 (yaylāq) に滞在し、自由な時間に折に触れてヘダーヤトの筆名で知られるレザーゴリー・ハーンによって書かれた史書『ナーセルの清浄の園』の件に従事していた。それ故に、テヘランの新聞印刷所 (dār al-inšā-ye rūznāme-’e Tehrān) に、私とレザーゴリー・ハーンとの間

で生じたこの会話を、お互いの台詞が混ざらないような方法で、カリフ権の館〔たるテヘラン〕の新聞に掲載するように、と要請する。[s.v. 24: 1]

作品を執筆した場所はティフリスの南西約20kmに位置する町コジョリ (Kojori)、あるいはその近郊であり、アーホンドザーデは避暑のためにこの地に滞在していたことが窺える。執筆日に関しては作品の末尾により詳細な記述があり、「〔ヒジュラ暦〕1279年ラビーウ・アル＝アウワル月2日」、すなわち、西暦（グレゴリオ暦）の1862年8月28日となっている [s.v. 24: 23; s.v. 25: 12b]。執筆目的は、テヘランの新聞、すなわち『イランの気高き政府の新聞 *Rūznāme-‘e dowlat-e ‘aliyye-‘e Irān*⁽⁶⁾』への掲載であった。

アーホンドザーデが考察の対象とした『ナーセルの清浄の園』とは、ヒジュラ暦1270～1274年（西暦1853～1858年）に執筆されたペルシア語年代記である。著名なティムール朝年代記『清浄の園 *Rowzat al-ṣafā*』に対する増補であり、サファヴィー朝以降の記述を含む。著者は、詩人、詩学者、歴史家、そして官僚としても活躍したレザーゴリー・ハーン・ヘダーヤト (*Rezā Qolī Hān Hedāyat*, 1800-1871) である [岡崎 1982: 75-76; Elr: “Hedāyat, Reżāqolī Khan”]。典型的な美文調のペルシア語年代記であり、技巧を凝らした修辞に満ちた流麗な文体で執筆されている。

アーホンドザーデは、『批判の書』で『ナーセルの清浄の園』の書きぶりを強く非難していく。『批判の書』の文体は非常に独特で、アーホンドザーデとレザーゴリー・ハーンの発言が交互に記される、戯曲のような体裁で書かれている。対話形式で記される両者の架空のやりとりを用いられているのは、非常に口語的なペルシア語である。アーホンドザーデは、実際に戯曲を執筆した経験から、このような書き方を思い付いたのだろう。

『批判の書』で主張されているアーホンドザーデの論点は、以下の3点に集約できる。すなわち、必要のない詩を挿入しないこと、脚韻のみにこだわった対句を使わないこと、事実と無関係な内容を記さないこと、である。以下の各章では、それらの論点を1つ1つ検証していく。

2. 必要のない詩を挿入しないこと

前章で引用した冒頭箇所を引き続き、アーホンドザーデは『ナーセルの清浄の園』の一部を抜粋し、読者に示している。少々長くなるが、アーホンドザーデが批判したペルシア語年代記の書きぶりを具体的に知るためにも、この抜粋

箇所を引用しよう。

イスカンダル⁷の位のハーカーン陛下がグーリヤーンの包囲と平定を断固として命じた時、偉大なるシャアバーン月10日に世界を駆けめぐる軍営は、山や砂漠における開けた場所を狹隘とした。色とりどりの大小の天幕が一面に張られた。グーリヤーンの外側は、ガズナやゴールの内側よりも人で溢れるようになった。大胆なる者たちの一部は、城の上部へと登ったが、城を破壊し壘壁を崩す弾丸の一撃によって、下部へと落下した。

グーリヤーンの四方は世界を征服するアミールたち、勇敢なる司令官たちに割り当てられた。アリーゴリー・ハーンの息子たるハビーボッラー・ハーン・シャーサヴァンは、祝福された大砲の指揮を任せられ、その地位において完全に独立していたが、グーリヤーンの北側に位置しており、その区域を任せられた。町の南側は、シャッガーギーの2部隊の司令官で「戦いにおける勇者 (bahādor-e jang)」とあだ名されるハーッジー・ハーン・ガラバーギーの割り当てとなった。西側は、ヴァリー・ハーン・タンカーボニー・ギーラーニー、モハンマドホセイーン・ハーン・アルジョマンディー・フィールーズクーヒー、サヴァードクーヒーとバンドベいの諸部族、マーザンダラーンの将軍たちに託された。東側は、一万人数隊長 (amīr-e tūmān) たるモハンマド・ハーン・イルヴァーニーと彼に託された者たちに至った。四方から地下道と坑道の掘削が行われた。城に籠もる者たちは城砦の堅固さとヘラートの統治者の援軍を頼りにしていたが、彼らの土台が地についていない (bar havā ast) こと、まもなくその堅固なる基礎が減じるであろうことに気付いていなかった。

10日にわたって地下道と坑道の件が遂行された。天の高みにあるシャーの中のシャーの方から、城砦を平定せよという明白なる命令が発行された。波打つオマーン湾のごとき軍勢が、四方からやって来た。太鼓とラッパとトランペットと大太鼓の嘆き声が、もの聞こえぬ岩にとっても耳鳴りとなり、城を叩く砲弾の吠え声が地表の広がり騒がせた。火の威力によって破壊するために塔の穴に火薬と石油と木材が詰め込まれた。そして、そこを渡れるように堀から水が抜かれて、土が満たされた。岩砕く大砲の砲弾の連発によって城砦の塔と壁は震え、穴だらけになった。そして、石を投じる臼砲の弾によって、壘壁はあるべき場所に留まらなかった。〈著者による〉(li-mu'allifi-hi) [s.v. 24: 1-3; cf. RŞN: XV. 8213-8214]

末尾の〈著者による〉というのは、レザーゴリー・ハーンが本文中に自作の詩を挿入する際に用いる標識である。実際、『ナーセルの清浄の園』では、この後に3行の詩が挿入されている。しかし、アーホンドザーデは、詩の前で一旦引用を終えてしまう。上述の箇所が続くのは、以下のような2人のやりとりである。

〈ファトフアリー〉

レザーゴリー・ハーン、後生だから、彼らが城をどのように奪ったのかを僕に見させてくれ。何故ここで君の詩を読むことになるのか。また今度読むから。

〈レザーゴリー〉

驚きだよ、君が〔そのような〕気分だとは。なぜ僕の詩を読まないのかね。

〈ファトフアリー⁽⁸⁾〉

兄弟、つまり、僕は詩集を読んでいるんじゃない。歴史書を読んでいるんだ。彼らが何をなしたかを見させてくれ。君、お願いだから (Hodā)、僕に構わないでくれ。自身の詩で僕の気分を惑わせないでくれ。内容が頭から抜け落ちてしまったよ。[s.v. 24: 3-4]

このように、ファトフアリー、すなわちアーホンドザーデは、そんな詩よりも、話の続きを早く教えてくれ、と催促するのである。一方でレザーゴリー・ハーンは、心血を注いで詠み上げた自身の詩を読ませたい。こうして、2人の間で詩を読む、読まないをめぐる押し問答が始まり、上記引用箇所の後もやりとりが続くこととなる。当人たちにとっては真剣な、しかしながら端から見るといささか滑稽な問答を通じて両者の感情は次第に昂ぶっていき、最終的には以下のような形に帰結する。

〈レザーゴリー〉

長々としゃべるな。間違っているのは君の方だ。読め。

〈ファトフアリー〉

僕の襟を何故掴むのか。いいから離せ。君の詩を読むよ、神かけて、読むから。信じてくれ。

〈レザーゴリー〉

嘘を吐くな。君は読まないだろう。君が読むかどうか、君の目の変化を僕は観察しているぞ。君は僕の詩を素通りするんだろう。その後の言葉の連なり〔だけ〕を手取るのだろう。

〈ファトフアリー〉

神かけて、僕は嘘を吐いていない。そうするしかないのだから、何故読まないことがあろうか。君は〔僕が詩を〕読まないという形では、僕を解放してはくれないだろう。けども、君の詩の内容が、とにもかくにも本題と関係していると期待しているよ。確か君は、兵士たちがどこその塔から攻撃を加えて、騎兵たちがどれその門から入っていった、と叙述していたな。では、〈著者による〉を読んでもみようか。

あたかも火星の体が地表から

諸天へと刻一刻と昇っていくように

これは一体何だね。火星とは誰なのか。城の件はどの様になったのか。ちゃんとやってくれ、レザーゴリー・ハーン。君の〔詩の〕続きの句を読むことから、私を免除してくれ。我慢できないよ。いっそ、殺してくれ。
〔…後略〕 [s.v. 24: 5-7]

このように、レザーゴリー・ハーンの圧力に屈して渋々ながら彼の詩を読み始めたアーホンドザーデであるが、結局、本来3行ある詩の1行目を読んだところで音を上げてしまう。なお、彼が「いっそ、殺してくれ」とまで言って読むことを拒んだ『ナーセルの清浄の園』の詩の残りの2行には、韻律上の破格のみならず、文法的にも不完全な箇所が存在することもあり、解釈するのが非常に難しい。ひとまず翻訳したものを、以下に示す [RŞN: XV. 8214]。

瞬く間に火の色の火星たちは

りゅう座から天の頂へ〔至ることを〕意図〔した〕

その城の獅子は命に飽いた

火星の遠地点が獅子の家へと入ったために

この詩の内容は占星術に基づいており、勇者の代名詞でもある火星 (merriḥ) の天球上での動きを描いている。「天の頂」と訳出した語は čarḥ であり、原義は「車輪」、そこから派生して「天球」という意味がある。しかしながら、そ

れでは意味が通らないため、「天の頂」と訳出し、火星が「りゅう座 (tennīn)」を経て「天の頂」、すなわち天の北極へと向かっていく様を描写したものと解釈した。実際、りゅう座は、天の北極付近に位置する星座である。もちろん、現実の火星は軌道傾斜角が極めて小さいため、見かけ上の軌道はほぼ黄道に沿ったものとなり、りゅう座や天の北極を通ることはあり得ない。すなわち、詩の2行目は、勇者たちが本来望むべくもない大望を抱いている様子を描写したものである。

詩の3行目にある「獅子の家 (hāne-'e šīr)」は、「獅子宮 (burj al-asad)」と解釈するのが最も分かりやすいのだが、やはり「家」という語が気になる。これは、占星術における「家 (bayt)」と解釈するのが良いだろう。しかし、そうであるとする、「家」は宮や星座と直接的に結ぶ付くものではないので、「獅子の家」とは、「獅子宮が位置している家」あるいは「しし座が位置している家」ということになるだろう。詩の後半は、「遠地点 (owj)」、すなわち地球から最も遠く離れるタイミングで火星がそこへと至ったことを述べている。⁽⁹⁾

いずれにせよこの詩は、戦士たちが命を捨てる覚悟で勇猛に戦っている様子を、占星術の知識を織り込みつつ技巧を凝らして語ったもので、何らの歴史的事実も含んでいない。アーホンドザーデが批判したのは、このような内容の伴わない詩を歴史書に挿入することであった。

3. 脚韻のみにこだわった対句を使わないこと

伝統的なペルシア語史書においては、同義語や対義語、あるいは類似する表現を並べて語調を整える「対句」が用いられることが通例であった。これらの対句は、しばしば脚韻も踏んでいた。例えば、前章冒頭の引用部の6行目にある「城を破壊し (qal'e-šekan)」と「塁壁を崩す (bāre-fekan)」や、29行目の「震え (tazalzol)」と「穴だらけに (taḥalḥol)」などは、このような対句表現の典型的な例である。

さて、前章で紹介した詩をめぐるやりとりが続いて、アーホンドザーデは、『ナーセルの清浄の園』のとある記述に突っかかる。それは、ガージャール朝第2代君主ファトフアリー・シャーの時代に起こった、王弟ホセイニングリー・ハーン2世の反乱に関する以下の叙述である。

〔前略…〕「王権は不毛である (al-mulk 'aqīm)⁽¹⁰⁾」〔という言葉〕の意味は、
気質が適正で無病である理性を持った者たちの考えの上に明らかに、そし

て明白になる。[s.v. 24: 8; cf. RŞN: XIII. 7460-7461]

ペルシア語の大辞典によると、「王権は不毛である」という警句は、「王権やスルターン権においては血縁が役に立たないことを意味する。なぜならば、それを求める際には父も兄弟も叔父も子も殺すことになるからである」[LM: “aqīm”]。そして、「気質が適正である (ṣaḥīḥ al-mezāj)」というのは、体内の元素の均衡がとれている状態を意味し、要は「健康である」ということである [cf. ウルマン 2022: 146-147]。アーホンドザーデは、この意味が「無病である (geyr-e saqīm)」と重なるのが気に入らない。また、「明らかに (vāzeh), そして明白に (lāyeh) になる」も冗文であると指摘する。後者は脚韻を踏む同義語を並べた典型的な対句表現であるが、同じ内容を示す言葉であるならそもそも不要である、とアーホンドザーデは言うのである。

そして、それ以上にアーホンドザーデが疑問を呈しているのが、この文が意味ある内容を伴っていないことである。アーホンドザーデは、次のように言う。

例えば、僕には多少なりとも理性がある。気質の適正さがあって、息災でもある。もし君が君の詩を読むことを僕に強制するなら、僕は病気になるてしまう。その時、君の言った「王権は不毛である」という言葉の意味は、僕の見識から隠されたままになってしまいうだろう。[…後略] [s.v. 24: 7]

つまり、件の警句の意味が「気質が適正で無病である理性を持った者たち」にのみ理解できるのなら、病気の者には当然理解できないことになる。アーホンドザーデは、もし自分に無理矢理詩を読ませれば病気になるてしまうから、お前の文章を理解できなくなてしまうが、それでも良いか、とレザーゴリー・ハーンに迫るのである。

それに対してレザーゴリー・ハーンは、この箇所は単に「不毛である」と「無病である」で脚韻を踏むことを意図しただけだと弁明する。そして、仮に読者が病気であったとしても、多少なりとも理性を持っているのなら、件の警句の意味は理解できるだろう、と認めてしまう。アーホンドザーデは、ならばこの一節は内容のない「余計な言葉 (alfāz-e zāyede)」である、と言って切り捨てる [s.v. 24: 9]。

自身の文章に「余計な言葉」など無いと反論するレザーゴリー・ハーンに対

して、アーホンドザーデは、『ナーセルの清浄の園』から「この表現の説き明かし (towzī'-e īn ešārāt) とこの言葉の磨き上げ (tanqīh-e īn 'ebārāt) は、以下の通り」という箇所を引用し、さらなる批判を加える [s.v. 24: 10; cf. RŞN: XIII. 7551]。以下、この件に関する2人のやりとりを引用しよう。

〈ファトファアリー〉

〔…中略…〕「この表現^{エシャーラート}の説き明かし」は、分かる。「この言葉^{エバーラート}の磨き上げ」は、もしも余計ではなく、脚韻のために生じたのでないなら、だったらどういったものであろうか。君たちの師であるミールザー・マフディー・ハーン・アスタラーバーディー (Mīrzā Mahdī Hān Astarābādī) はこのような箇所の例として、単に「この話^{マガール}の説き明かし (towzī'-e īn maqāl)」と書き記している。彼もまた、こう言うことだってできた。

この話^{マガール}の説き明かしとこの陶器^{ソファール}の磨き上げ (tanqīh-e īn sofāl) は、以下の通り。

〈レザーゴリー〉

はっはっはっ！ 驚いた！ 君は文盲だ。「この陶器の磨き上げ」とは、いったい何か。

〈ファトファアリー〉

レザーゴリー・ハーン、何故笑う。君の笑いの原因となるいかなる言動が僕から生じたか。僕もまた脚韻を踏んだ語を言ったということが、過ちだということか。ならば、何故他の者たちは、〔韻を踏んだ語を〕言うのか。

〈レザーゴリー〉

言葉 (soḥan) は、この中にはない。

〈ファトファアリー〉

なら、言葉は何ものの中にあるのか。「陶器^{ソファール}」が「話^{マガール}」に対する脚韻にならないのならば。

〈レザーゴリー〉

脚韻にはなりうるさ。だけど、意味がない。

〈ファトファアリー〉

レザーゴリー・ハーン、「磨き上げ」の語が「言葉^{エバーラート}」に適合するのならば、「陶器^{ソファール}」には、なおいっそう適合しうる。何故意味をなさないのであるか。〔…後略〕 [s.v. 24: 10-12]

レザーゴリー・ハーンは、「この表現^{エシャーラート}の説き明かし」と「この言葉^{エバーラート}の磨き上げ」の組み合わせは意味のある脚韻であるが、「この話^{マガル}の説き明かし」と「この陶器^{ソファール}の磨き上げ」の組み合わせは意味のない脚韻であると考ええる。一方でアーホンドザーデにとっては、両者の価値は同等である。どちらも脚韻を踏んでいるし、「言葉を磨き上げる」という表現が成立するのと同様に、「陶器を磨き上げる」という表現もまた成立するからである。「この陶器^{ソファール}の磨き上げ」に意味がないならば、「この言葉^{エバーラート}の磨き上げ」もそれと同じくらいに意味がない。いずれも「冗文 (motarasselâne)⁽¹¹⁾」に過ぎない、とアーホンドザーデは考えるのである [s.v. 24: 13]。

なお、レザーゴリー・ハーンらの「師」として言及されているマフディー・ハーン・アスタラーバーディーとは、アフシャール朝 (1736-1796) の開祖ナーデル・シャー (r. 1736-1747) に仕えた歴史家で、彼に関する2つの年代記『ナーデルの世界を征服する書 *Jahān-gošā-ye Nāderī*』、『ナーデルの真珠 *Dorre'e Nādere*』を執筆したことで知られる人物である [E12: “Mahdī Khān Astrābādī”; E1r: “Astrābādī, Mahdī Khan”]。上記引用部は、アーホンドザーデがマフディー・ハーンを高く評価している記述のようにも見えるが、実はそうではない。と言うのも、アーホンドザーデは、冗文の多さ故に「名声を得なかった」歴史書の例として、『ナーデルの真珠』を『ヴァッサーフ史 *Tārīḥ-e Vaṣṣāf*』⁽¹³⁾とともに挙げているからである [s.v. 24: 13]。その『ナーデルの真珠』よりも『ナーセルの清浄の園』はさらにひどい、というのがアーホンドザーデの下した評価だったのである。

さて、レザーゴリー・ハーンがいかに冗文を用いているかを示すために、アーホンドザーデは『ナーセルの清浄の園』のホセイニングリー・ハーン2世の反乱に関する記述を長々と引用し、そこに含まれる対句表現を列挙していく。例えば、「金襴の衣服 (pūšēš-hā-ye dībā)」と「美しいスープ (ḥ^oreš-hā-ye zībā)」、「アラブの馬たち (markab-hā-ye tāzī)」と「シーラーズの美女たち (maḥbūbe-hā-ye Šīrāzī)」、「首輪を付けた童子たち (sāde-hā-ye moṭavvaq)」と「清澄な酒 (bāde-hā-ye moravvaq)」、「ボロに興じる側仕えたち (vošāq-e gūy-bāz)」と「馬を駆る小姓たち (gōlāmān-e asb-andāz)」などである [s.v. 24: 13-14; cf. RŠN: XIII. 7461]。

アーホンドザーデによるこの箇所引用はあまり正確ではなく、『ナーセルの清浄の園』の原文からの省略や改変が見られる。何よりも問題なのは、アーホンドザーデ自身が書いた文を、原文の中に紛れ込ませている点である。ただ

し、アーホンドザーデによる加筆箇所には、どちらの手稿本でも上に線が引かれており、読者には原文との区別が明確につくようになっている。以下、その加筆箇所を引用しよう。

青年らしい虚栄心に満ちた日々と楽しく望みが満たされた季節が、空想で
いっばいの頭でもって、そしてなみなみと満ちた酒の蒸気によって、狼の
拳の同席者たちや豹の背の列席者たちとともに [s.v. 24: 14]

この箇所は確かに「青年らしい (javānī)」と「望みが満たされた (kāmrānī)」、
「空想でいっばいの (por-hiyāl)」と「なみなみと満ちた (mālā-māl)」、「狼の
拳 (gorg-mošṭ)」と「豹の背 (yūz-poṣṭ)」と脚韻を踏んだ対句が用いられてい
るのだが、レザーゴリー・ハーンの元の文と比べて対句の質が明らかに低く、
違和感がある。そして、最大の問題点はやはり「狼の拳の同席者たち」「豹の
背の列席者たち」という意味不明な文句であろう。もちろん、レザーゴ
リー・ハーンもこの違和感にすぐに気が付き、勝手に文を追加したことに関し
てアーホンドザーデを詰問する。アーホンドザーデは、「[この文を] 追加する
ことが必要だったんだ」と反論するのだが、それに続く2人のやりとりは以下
の通りである。

〈レザーゴリー〉

君が言っている「狼の拳^{モシュト}」と「豹の背^{ボシュト}」とは、どういう意味だ。

〈ファトフアリー〉

ここで、僕は関連性 (tanāsob) と脚韻を検討している。意味はないよ。
「狼」は「豹」と関係があるだろう。それから、「拳^{モシュト}」と「背^{ボシュト}」も互いに
脚韻を踏んでいるだろう。本当に偉大な脚韻だよ。

〈レザーゴリー〉

君が付け加えたものは、全くもって必要ない。

〈ファトフアリー〉

その面では、君が書いたものも、多かれ少なかれ余計だ。[…後略] [s.v.
24: 15-16]

このようにアーホンドザーデは、対句の本質が2つの単語の関連性と脚韻で
であると指摘し、その両者を備えた「狼の拳^{モシュト}」と「豹の背^{ボシュト}」もまた立派な対句で

あると主張する。これらの言葉には確かに意味はないかもしれないが、何らの歴史的事実を伝えていないという点では、レザーゴリー・ハーンの記している「プーシェシュハーイェ・ズイーバー金 欄 の 衣 服」と「ホレシュハーイェ・ディーバー麗 しい ス ー プ」なども変わらないではないか、と言うのである。

アーホンドザーデによると、年代記のような散文作品に脚韻は必要ない。脚韻にこだわるあまりに内容を伴わない同義語が反復されることとなり、その結果、文章から「明白さ (vozūh)」が失われてしまうからである。また、彼は、脚韻という「児戯」はアラブ人によってイランにもたらされた「純粋な過ち」である、と考える [s.v. 24: 12-13]。

アーホンドザーデは、この反アラブともいえる思想を、代表作である『キャマール・アッ＝ドウレの手紙 *Kāmal üd-Dövlə məktublari*』を含むいくつかの作品や書簡でも語っている。彼は、イランの衰退の原因を、アラブ人によってもたらされた「外来の」文化や制度であるとして激しく批判し、その排除を訴えているのである [Əsərləri L: 23; Alefbā: 225]。特に彼が嘆いているのが、「世界で最も甘美な言語」であるペルシア語が「粗野で下品なアラビア語」によって汚されていることであった [Alefbā: 172]。『批判の書』においても、既に同様の主張がなされているのである。

4. 事実と無関係な内容を記さないこと

アーホンドザーデが言うには、レザーゴリー・ハーンは、「歴史とは何らの関連を持たない難解で余計な話題の断片を書いて」おり、その結果、「読者と写字生 (kāteb) の苦労の原因となっている」 [s.v. 24: 16]。

そういった箇所为例としてまず挙げられているのが、ナーデル・ミールザー (Nāder Mīrzā) の最期に関する記述である。稀代の梟雄ナーデル・シャーの曾孫に当たるこの人物は、ガージャール朝成立後も自立を図って抵抗を続けていた。しかし、最終的にはガージャール軍に捕らえられ、1803年3月にテヘランで処刑された [小牧 1992: 20-21]。この事件に関して、『ナーセルの清浄の園』は、以下のように叙述している。

〔前略…〕理性と伝承に従って、復讐と仕返しは感覚の諸世界において感じられている。このことは、聖法の諸論拠、真実の諸伝承によって明文で述べられている。神はたとえ遅さを取っても、一方で堅さを取る。創造物〔たる人間〕には、様々な形と様々な名の変化を検討することによって

真実〔を見いだすこと〕(ḥaqāyeq) と〔その事象に〕名を付けること (mosammā) への怠慢が生じている。これらのしるしを確認することは、歴史の道に反する (moḥālef⁽¹⁴⁾) のではなく、学問の微妙な諸点、歴史を観察することの諸要点のひとつである。もし、我々が知るように、仕返しと償いの一部を叙述することによって核心を突く (nokte rānīm) ならば、上っ面しか見ない者たちは〔このことを〕批判して、普通の方法によって我々の記述を受け入れないだろう。[RŞN: XIII. 7512-7513; s.v. 24: 16-17]

アーホンドザーデはこの箇所を引用した上で、「シェイフ・バハーイーの代数学 (jabr-e moqābele⁽¹⁵⁾) の方が〔…中略…〕理解が容易」であり、この文章の意味は「神がご存じ」、換言すれば、神以外の誰にも分からない、という評価をくだす [s.v. 24: 14]。しかし、文章の難解さ以上にアーホンドザーデが問題視しているのは、その内容が事実反していることである。

上の文章を、アーホンドザーデが引用した箇所の前も含めて読み解くと、ナーデル・ミールザーは彼の曾祖父であるナーデル・シャーが犯した罪に対する報いとして、刑死という運命を与えられた、ということになる [RŞN: XIII. 7510-7513]。しかも、レザーゴリー・ハーンは、その根拠を「聖法」、すなわちイスラーム法に求めている。

アーホンドザーデは、「そして荷 (罪) を負う者は他の者の荷を負うことはない」という『クルアーン』の章句を引用しつつ、これを批判する。すなわち、「輪廻の民とインドの人々 (ahl-e tanāsoḥ va honūd)」とは異なり、イスラーム教は輪廻転生や因果応報を認めないのだから、レザーゴリー・ハーンの手紙は、事実反した空虚なものであるというわけだ [s.v. 24: 17-18]。

同様の例としてアーホンドザーデが挙げているのが、ダール・アル＝フォヌーン (Dār al-fonūn⁽¹⁷⁾) の総長職 (riyāsat) の件である。『ナーセルの清浄の園』では、まず、ナーセル・アッ＝ディーン・シャーが、ダール・アル＝フォヌーンの総長職を若輩者ではなく、「十分な忠実さ (vofūr-e amānat)」や「信仰心の発露 (zohūr-e diyānat)」などといった数々の美質を兼ね備えた老練な人物に託そうとしていた、と述べられている [s.v. 24: 19; cf. RŞN: XV. 8769-8770]。そして実際にダール・アル＝フォヌーンの総長職に選ばれたのがレザーゴリー・ハーンであったのだが、このことに関して『ナーセルの清浄の園』の記述は、以下のようになっている。

〔前略…〕公正に見て、これらの賞賛すべき性質のうちのひとつも備わって⁽¹⁸⁾いなかったにもかかわらず、イランのシャーの中のシャーたる陛下は、恩寵と寛大さのために、この受け入れられざる老いたる奴隷〔たる私〕を、この偉大なる仕事を受け入れる者と認めて、私を吉兆の御前へと呼び、私をダール・アル＝フォヌーンの総長職へと送った。[RŠN: XV. 8769-8770; s.v. 24: 19]

アーホンドザーデは、ここに嘖み付く。「レザーゴリー・ハーンが美質を有していない」のならば、「シャーがレザーゴリー・ハーンをダール・アル＝フォヌーンの総長職に選んだ」という事実から、「シャーはダール・アル＝フォヌーンの総長職には美質を兼ね備えた者がふさわしいと考えていた」という推論は導出できない、と言うのだ [s.v. 24: 20]。

もちろん、この箇所は著者であるレザーゴリー・ハーンが自身を卑下して記したものであるし、アーホンドザーデも「君は、僕は謙遜して (*haẓm al-nafsī*) このように語ったんだ、と言うのだろう」と、そのことを認めている。しかし、これまた論理的に考えるならば、「十分な忠実さ」の否定は「裏切り (*ḥiyānat*)」、「信仰心の発露」の否定は「不信心 (*bī-dīnī*)」であるのだから、それらが備わっていない⁽¹⁹⁾ということは、「僕は裏切り者で不信心者だ」と言っているのと同義である [s.v. 24: 20]。

明記はされていないが、アーホンドザーデはレザーゴリー・ハーンのことを「裏切り者」とも「不信心者」とも思っていないのだろう。それでも、あるいはそれだからこそ、謙遜に満ちた上述の記述に対して「〔君の書いた〕内容は真実ではない。きちんと考え抜いてみよ」と手厳しい批判を加えるのである [s.v. 24: 20]。

5. あるべき歴史書の姿

このように、アーホンドザーデは、レザーゴリー・ハーンの評価すべきところは評価し、彼の全てを貶めたりはしていない。また、レザーゴリー・ハーンの主張に一理ありとみれば、それを認め、自身の考えを改めたりもしている。例えば、脚韻のみにこだわった対句に関する議論の中に、以下のようなやりとりが見られる。

〈ファトフアリー〉

例えば、アアザム・ハーンの息子モハンマド・ハーン・アフガーンのパムとナルマーシールにおける反乱の記述において、君は言った。

モハンマド・ハーンはガージャールの指揮官の到着の名声のためにパムを空にし、甲高い声ス イー ルのうめきとともにナルマーシールへの途についた。⁽²⁰⁾

〈レザーゴリー〉

君は分かっている。これは内容が空っぽというわけではない。うめきは低い声であったかもしれないし、甲高い声であったかもしれない。この時、モハンマド・ハーンは、甲高い声ス イー ルのうめきとともにパムから逃げて、ナルマーシールに脚韻を整えたのだ。言わずもがな、「低い声バ ム」と「甲高い声ス イー ル」という言葉の関係のどこに、余分があるのか。

〈ファトフアリー〉

すばらしいよ、レザーゴリー・ハーン、実のところ私はこれらの点に気付いていなかった。[…後略] [s.v. 24: 9-10]

このように、アーホンドザーデは「甲高い声ス イー ル (zīr)」を「ナルマーシール (Narmāšīr)」と脚韻を踏むことだけを意図した語としか見なかったのだが、レザーゴリー・ハーンはきちんと内容が伴っているのだ、と反論している。地名であるパム (Bam) には同音同綴の「低い声バ ム」という単語があり、今回パムを捨てナルマーシールへと向かったモハンマド・ハーン・アフガーンが逃亡時に発したうめきが「低い声バ ム」ではなく「甲高い声ス イー ル」であったという歴史的事実をも示している、と言うのだ。

なお、アーホンドザーデは『批判の書』の清書を終えた後に、この箇所を含む別の意味にも気付いたらしい。s.v. 24手稿本には、上記引用箇所の周辺の余白部分に、アーホンドザーデ本人によるものと思われる追加の書き込みがなされている。当然ながら、草稿である s.v. 25手稿本には、この加筆部分は存在しない [s.v. 25: 5a]。加筆された内容は、以下の通りである。

〔前略…〕この言葉は、また別の関係性もないわけではない。なぜなら、「ズィール」の語は、時に通常の場所の意味を示すこともある。シェイフ・サァディー——神が彼を嘉し給いますように——がおっしゃるように。たとえタール人がこの半陰陽者を殺しても、

その報いにタタール人を殺してはならぬ。
彼はいったい何時までバグダードの橋のようであり得よう、
水はその下を流れ、人が上を通るような！⁽²¹⁾
モハンマド・ハーンが逃げる際にどのような状況であったのか、知ることができた。〔…後略〕 [s.v. 24: 10]

このように、アーホンドザーデはサアディーの詩も引用しながら、zīrという単語のもうひとつの意味である「下」もまた、モハンマド・ハーンの逃亡の様子に関する歴史的事実を示していると考えるのである。しかし、この箇所はどのように解釈すべきなのか、筆者は未だに答えが見いだせずにいる。「下」であるナルマーシールに向かったことがモハンマド・ハーンの運命の転落の様子を示しているということなのか、あるいは「下」を通して隠れ潜みながら逃亡したということなのか。

いずれにせよ、アーホンドザーデは、レザーゴリー・ハーンの主張も尊重し、批判すべきところにだけ批判を加えている。それは、彼が目指したのものが「批評」だからである。アーホンドザーデは、『批判の書』の末尾に近い部分でこう言っている。

〔前略…〕ある人がある本を著述している時、別の誰かが彼の著作の話題に関する批判を、心に苦痛を与えたり、著者に対して礼儀に反したりする一文字たりとも無いという条件で書き記し、また、用いる言葉は必ず典雅な方法 (tarīq-e ẓarāfat) を取る。この行いは、「批評 (クリティカ)」と呼ばれる。著者は彼に返答をする。その後、第三者が現れて、著者の返答を承認するか、あるいは批判者の言葉を優先する。〔…後略〕 [s.v. 24: 21]

そして、ヨーロッパにおいて普及しているこの「批評」という行いは非常に利益があるもので、この方法がイランにおいても普及したなら、必ず「イランの人々の未来の世代 (tabaqe) の進歩の原因となるだろう」と述べている [s.v. 24: 21-22]。そうであるからこそ、アーホンドザーデは、この作品が新聞に掲載され、広くイランの人々に読まれることを願ったものらしい。

アーホンドザーデにとって、理想的な歴史書とは、「何ら益もなかった叙情詩 (ghazal) や頌詩 (qaṣāyed) といった韻文を取り去り〔…中略…〕脚韻や子供じみた誇張やばかばかしい比喩を完全に回避して、ただただ適切な内容を

迫って」いるものであった [s.v. 24: 22]。また、「ただただ諸事件を叙述することだけが、歴史家の義務である」とも述べている [s.v. 24: 18]。

しかし、アーホンドザーデは韻文作品を完全に否定しているわけではない。実際、彼は「例えばフェルドウスィーの『王書 *Šāh-nāme*』やシェイフ・サァディの『果樹園 *Būstān*』や、様々な諸民族の状況や方法についての逸話や説明を含む類似〔の作〕品のごとき叙事詩 (*maṣnavī*) の形式での詩を読むこと」を推奨している [s.v. 24: 22]。彼が言いたいのは、脚韻などの修辞は韻文作品で披露すべきであって、散文作品たる歴史書には不要だということであった。

6. 『批判の書』は後世に影響を与えたか

19世紀後半になると、西洋の影響などによって、ペルシア語年代記の叙述方法に変化が生じた。その最初期の例が、1868年に第1巻が完成した『帝王たちの書 *Nāme-'e ḥosrovān*』である。著者であるジャラル・アッ＝ディーン・ミールザー (Jalāl al-Dīn Mīrzā, 1827-1872) は、アラビア語をはじめとした外来語の語彙を排除した「純粋なペルシア語」でこの作品を執筆した [EIr: “Jalāl al-Dīn Mīrzā,” “Historiography, viii. Qajar Period”]。1881年から1883年にかけて出版された『ナーセルの整史 *Tārīḥ-e montażam-e Nāserī*』も、そうした例の1つである。この年代記においては、ヒジュラ暦に西暦が併記され、欧米諸国の歴史についても叙述されていた [近藤 2023: 111; EIr: “E‘temād-al-Saltāna, Moḥammad-Ḥasan Khan Moqaddam Marāḡa’ī”]。また、守川氏によると、『ナーセルの清浄の園』にも、既に変化の兆しが見られるとのことである [守川 2010: 14]。このようなペルシア語による歴史叙述の変化の流れに、『批判の書』は直接的な影響を与えているのだろうか。そもそも、『批判の書』は、首都テヘランをはじめとするイランの人々にどの程度読まれたのであろうか。

第1章で触れたように、アーホンドザーデは、『批判の書』を『イランの気高き政府の新聞』を通じて公にしようと考えていた。しかし、実際に『イランの気高き政府の新聞』を通覧してみると、『批判の書』は結局掲載されなかったことが分かる [Rūznāme]。投稿したものの掲載を拒否されたか、あるいはそもそも投稿されてすらいなかったか、いずれかであろう。アーダミーヤト氏もパールスィーネジャード氏も前者の説を採っているようであるが、ともに根拠は示していない [Parsinejad 1988: 56; Ādamīyat 1349š: 244]。

また、アーダミーヤト氏は、『批判の書』は新聞に掲載されることはなかったものの、テヘラン在住のアーホンドザーデの友人たちに原稿の写しが何冊か

送られていた、と考えている。作品の内容は、テヘランの「教養ある人々 (ahl-e adab)」の間である程度知られるようになり、最終的にはレザーゴリー・ハーン自身の耳にも入った。アーダミーヤト氏がその根拠としているのは、ガージャール朝の官人アブド・アル＝ヴァッハブ・ハーン (‘Abd al-Vahhāb Ḥān Nāyeb al-Vozarā) に宛ててアーホンドザーデが送った手紙である [Ādamīyat 1349š: 244-245]。この手紙が送られたのは、ヒジュラ暦1283年モハッラム月下旬、すなわち西暦1866年6月上旬で、内容は以下の通りである。

〔前略…〕それから、私は、私の偉大なる父であるララバーシー (Lale-bāši) を怒らせてしまいました。私自身、自分の罪を認めていますし、自分のことを反抗的な息子とみなしています。矢は弓から放たれてしまっており、私にはどうしようもありません。今、〔彼と〕和解して許しを請うという考えを、〔状況の〕調査と何らかの手段によって〔実際の〕行動へと移しているところです。しかし、何らの手段も見つけることができず、弱っております。貴殿の洞察力に優れ、細を穿つお考えが、この件に関する解決策を見いだすことがない限りは。[Alefbā: 88-89]

手紙の中で言及されているララバーシーとは、レザーゴリー・ハーンに与えられた称号である [Elr: “Hedāyat, Reżāqolī Khan”]。つまり、アーホンドザーデは、レザーゴリー・ハーンに失礼を働いて怒らせてしまったことを後悔しており、アブド・アル＝ヴァッハブ・ハーンに執り成しを頼んでいるのである。そして、アーダミーヤト氏だけでなく、アーホンドザーデの書簡集の編者であるモハンマドザーデ氏も、この箇所の記事が『批判の書』に関するものであると考えている [Alefbā: 89 fn.]。筆者も、その点に関しては同意である。

そうなると、『批判の書』が執筆された1862年8月から約4年後にあたる1868年6月の時点で、レザーゴリー・ハーンはその内容を多少なりとも知っていた、ということになる。しかし、それは、実際に『批判の書』の写しがテヘランに送られていたことを、必ずしも意味しないだろう。例えば、ティフリスでアーホンドザーデに『批判の書』を見せてもらった誰かがテヘランでその内容を語った可能性もあるし、アーホンドザーデが『ナーセルの清浄の園』を批判しているらしいという噂だけがテヘランに届いた可能性もある。さらに言えば、レザーゴリー・ハーンを怒らせた理由が別にある可能性、上述の手紙の内容がそもそも事実ではない可能性なども完全には捨てきれない。いずれにしても、

アーダミーヤト氏の見解は、根拠が薄弱であると言わざるを得ない。

『批判の書』の原稿、あるいはその写しは、テヘランに送られていなかったのかもしれない。また、仮にそれらが送られていたとしても、『批判の書』の具体的な内容は、イランにおいてほとんど知られていなかったのではないだろうか。当然ながらその場合、この作品の周囲への影響もほとんど無かった、ということになる。本章の冒頭で言及したジャラル・アッ＝ディーン・ミールザーとアーホンドザーデとの間の書簡は、その根拠となるかもしれない。両者は複数回にわたって手紙のやりとりをしているが、それらの中には、『批判の書』に関する直接的な言及はもとより、その内容を踏まえたような議論も見られないのである [Alefbā: 170-176, 182, 220-228, 247-248, 373-378, 393-394]。

結局のところ、『批判の書』の内容がどの程度知られていたのかに関しては、現時点で結論を出すことができない。今後、アーホンドザーデの作品や書簡をより詳細に分析し、さらには、テヘランにおける手稿本の調査なども行っていく必要があるだろう。その上で、『批判の書』、あるいはアーホンドザーデの思想がペルシア語による歴史叙述にどの程度の影響を与えたのかについて、明らかにしていくつもりである。

むすび

以上、本稿では、アーホンドザーデの『批判の書』の内容を詳細に紹介してきた。そこに見られたのは、論理的思考を重視する姿勢であり、また歴史を文芸から明確に分離する考え方であった。アーホンドザーデが理想とした歴史叙述の、あるいは歴史学のあり方は、合理主義的で啓蒙主義的なものであった、とまとめることができるだろう。また、ロマン主義的な民族観を有していた彼にとって、民族の偉大なる過去を知る手段である歴史は非常に重要な位置を占めていたと思われる [塩野崎 2017: 163]。そのような彼にとって、『ナーセルの清浄の園』は、不必要な修辭を多用することで読者の幅を意味なく狭めてしまっているように見えたのであろう。

それ故に、アーホンドザーデは、歴史的事実のみを記せ、とレザーゴリー・ハーンを痛烈に批判したのである。そして、この主張をなすにあたって採用したのが、口語的な平易な言葉を用いた文章と、戯曲のような体裁であった。これは、より幅広い層の人々に読まれることを目指したためであろう。しかし、『批判の書』が結局新聞に掲載されなかったこともあり、彼の目的は達成されずに終わってしまった。

また、アーホンドザーデは「批評」、すなわち「典雅な方法」による叙述を目指していたが、これは達成できていただろうか。確かに、本稿第5章などで見たように、アーホンドザーデは『ナーセルの清浄の園』の良いところは良いと賞賛している。しかし、第2章で引用した、レザーゴリー・ハーンが自身の詩を無理矢理読ませようとする場面などからは、アーホンドザーデが彼を小馬鹿にしている印象を受ける。そもそも、架空の対話という形式そのものが、相手に対する礼節を欠いたものであっただろう。『批判の書』の語り口が「典雅な方法」であったとは、筆者には到底思えない。アーホンドザーデ本人も、後になって書簡の中で「自分の罪を認めています」と吐露しているように、この点を自覚していた。一方で、ペルシア語年代記の翻訳と解釈にいつも悩まされている身としては、美文の諸技法を無意味なものとして次から次へと斬り捨てていくアーホンドザーデの書きぶりが非常に痛快なものであったことも、また確かである。

ところで、アーホンドザーデは、『批判の書』のアイディアをどのように思い付いたのだろうか。あるいは、彼が「理想の歴史書」として具体的に想定していた作品などはあったのだろうか。アーホンドザーデが影響を受けた西欧の思想家としては、タギーザーデ氏の先行研究がモンテスキュー、フランシス・ベーコン、ヴォルテール、カント、ヘーゲル、ルナン、ミル、スピノザ、ヒューム、ギゾー、バックル、ラボックといった名を挙げている [Тагизаде 1991: 113-177]。なかでもヒュームとミルには深く傾倒していたようで、アーホンドザーデは彼らに関する専論も著している [Əsərləri K: 297-301; Məqālāt: 121-124]。

そうすると、アーホンドザーデの「理想の歴史書」の候補としては、まずヒュームの『イングランド史 *The History of England*』が挙げられるだろう。あるいは、西欧の歴史書ではない可能性もある。例えば、カラムズィーン (Николай Михайлович Карамзин, 1766-1826) による『ロシア国家の歴史 *История государства руссiйского*』なども、その候補となろう。19世紀前半に活躍した南東コーカサスの思想家・歴史家であり、アーホンドザーデの年長の友人でもあったバキユハノフ (Abbasqulu ağa Bakıxanov, 1794-1847) も見逃せない。彼の代表作である『エラムの薔薇園 *Golestān-e Eram*』は、まさに簡潔な文体で歴史的事実のみを記したペルシア語史書であるからだ [cf. 塩野崎 2017: 121-145]。アーホンドザーデがこれらの歴史書を実際に読んでいたかも含めて、今後と課題としたい。

【付記】 本稿は、科研費・若手研究「ロシア帝政期南東コーカサスの「シーア派化」と「非イラン化」」（研究代表者：塩野崎信也、19K13379）の研究成果の一部である。

注

- (1) ロシア語式にアフンドフ（Ахундов）と呼ばれることもあり、彼自身も両方の名を用いていた。また、現代アゼルバイジャン語では、ミールザー・フェテリー・アフンドザーデ（Mirzə Fətəli Axundzadə）と呼ばれることが多い。
- (2) 当時はヌハ（Nuxa）とも呼ばれた。
- (3) 現在のギャンジャ（Gəncə）。アゼルバイジャン共和国の西部に位置する。
- (4) 現在のジョージア的首都トビリシ。当時ティフリスと呼ばれたこの都市は、ロシア帝国によるコーカサス支配の拠点であった。
- (5) 番号の振り直し作業は2023年9月現在も終了していないようであり、新たな番号は一部の所蔵書にしか付されていない。本稿では、先行研究との整合性を保つためにも、旧番号も併記している。
- (6) ガージャール朝イランにおいて週刊で発行されていた政府広報。1851年2月7日、『事件簿 *Rūznāme-ye vaqāye‘-e ettefāqīye*』という誌名で創刊され、1860年8月23日に発行された第472号をもって『イランの気高き政府の新聞』と改称された [Elr: “Journalism in Iran, i. Qajar period”]。
- (7) 『ナーセルの清浄の園』の原文では、「掘削と地下道と坑道」となっている [RSN: XV. 8214]。
- (8) s.v. 24手稿本、s.v. 25手稿本ともに、実際に「ファトファアリー」と記されているのは1つめの台詞の箇所のみで、2つ目以降には、ファトファアリーの頭文字である fa’ の文字だけが書かれている。同様に、レザーゴリー・ハーンの台詞も、2つ目以降は、その頭文字である rā’ の文字のみで示されている。
- (9) 占星術に関しては、例えば『占星術教程の書』の翻訳などでまとまった情報を得ることができる [山本・矢野（訳）2010-2013]。
- (10) パールスィーネジャード氏は、この箇所を「かの王には子供がいない（The king is childless）」と翻訳している [Parsinejad 1990: 41]。おそらく、原文を al-malik ‘aqīm と読んだのだろう。一方、アゼルバイジャン語訳や2つのロシア語訳は、定冠詞 al- を省いた上に mulk (mol) にエザーフェを付けて molk-e ‘aqīm と読んでいる。また、ロシア語訳はいずれも、これを「はかない王権（недолговечное владычество）」と訳出しているが、アゼルバイジャン訳では訳出はされず、原語がそのまま書かれている [Ахундов 1: 218; Ахундов 2: 212; Əsərləri K: II. 218; Əsərləri L: II. 195]。これらは、いずれも誤った解釈である。
- (11) 本来は「美文、格調高い文章」という程度の意味で用いられる語 [LN: “motarasselāne”]。
- (12) 原文では、『真珠 *Dorre*』とだけ書かれている [s.v. 24: 13]。アーダミーヤト氏やパールスィーネジャード氏は、これが『ナーデルの真珠』を指していると考えている [Ādamīyat 1349š: 242; Parsinejad 1990: 43]。『真珠』として言及されうる

ペルシア語年代記の候補が他には思い当たらないこと、また実際に『ナーデルの真珠』が非常に技巧的な文体で書かれていることから、筆者も両氏に同意する。

- (13) ヴァッサーフ (Vaṣṣāf al-Hadre, Šehāb al-Dīn ‘Abd Allāh b. ‘Ezz al-Dīn Faḡl Allāh Širāzī) によるイルハーン朝年代記で、1312年に完成した。『ヴァッサーフ史』は通称で、より正式な書名は『諸都市の分割と諸世紀の推移 *Tajziyat al-amṣār va tazjiyat al-a’šār*』。修辞を凝らした極めて技巧的な文体で書かれており、後代、ペルシア語年代記の手本とされた [EI2: “Vaṣṣāf”]。
- (14) 『批判の書』には、この箇所後に「[受け入れられない (*lā nusallim*)」ではなくて、「反する」である」というアーホンドザーデによる注記が付されている [s.v. 24: 16-17]。
- (15) シェイフ・バハーイーとは、サファヴィー朝時代を代表する学者・建築家であるバハーウ・アッ＝ディーン・アーメリー (1547-1621) のこと。また、「代数学」とは、具体的には彼の作品の1つである『計算の概要 *Ḥolāṣat al-ḥesāb*』を指すと考えられる。[EI: “Bahā’ al-Dīn ‘Āmelī”]。
- (16) 『クルアーン』第35章第18節。日本語訳は中田氏監修のものに従った [中田 (監修) 2014: 466]。
- (17) 1851年に開設されたイランで最初の近代的高等教育機関 [EI: “Dār al-fonūn”]。
- (18) 『ナーセルの清浄の園』の原文ではこの箇所の動詞は3人称形が用いられているが、『批判の書』の引用部では1人称形が用いられ、「私には備わっていないにもかかわらず」となっている [s.v. 24: 19]。
- (19) 本文では、「十分な忠実さ」など賞賛される性質を表す語と、「裏切り」など恥ずべき性質を表す語の関係を示すのに、「対義語 (*ẓedd*)」という単語が使われている。また、「人は、賞賛される性質を備えているか、恥ずべき性質〔を備えている〕か、2つの状況のうちのいずれかである。中間はない」とも語られている [s.v. 24: 20]。これらから、ここで言う「対義語」が、論理学で言うところの「否定」を意味していることが分かる。
- (20) cf. RŠN: XIII. 7543.
- (21) 『薔薇園 *Golestān*』第3章第12話より。なお、日本語訳は、蒲生氏によるものを利用した [蒲生 (訳) 1964: 190-191]。

参考文献

【史料】

Alefbā: Mīrzā Faḡh ‘Alī Āḡḡvond’ūf. *Alefbā-ye jadīd va maktūbāt*. Ḥamīd Moḡammadzāde (ed.), Bākū, 1963.

Əsərləri K: *Mīrzə Fətəli Axundov: Əsərləri*. 3 cildə. H. Məmmədşadə (red.), Bakı, 1958-1962.

Əsərləri L: *Mīrzə Fətəli Axundzadə: Əsərləri*. 3 cildə. H. Məmmədşadə (red.), Bakı, 2005.

Maqālāt: Mīrzā Faḡh ‘Alī Āḡḡvondzāde. *Maqālāt*. Baqer Mo’menī (ed.), Tehrān, 1351š.

RŠN: Rezā Qolī Ḥān Hedāyat. *Tārīḡ-e rowṣat al-ṣafā-ye Nāşerī*. 2nd edition, vol. 12-15,

- Jamšīd Kiyānfār (ed.), Tehrān, 1385š.
- Rūznāme: Mīrzā Abū al-Ḥasan Ḥān Šanī‘ al-Molk Ġaffārī. *Rūznāme-’e dowlāt-e ‘aliyye-’e Īrān*. Jamšīd Kiyānfār (ed.), Tehrān, 1370š.
- s.v. 24: Mīrzā Fath ‘Alī Āḥ^vondzāde. *Resāle-’e Īrād*. Azərbaycan Milli Elmlər Akademiyası, M. Füzuli adına Əlyazmalar İnstitutu, fond 2, s.v. 24 (Apx. 2, Г-11/188, инв. 193).
- s.v. 25: Mīrzā Fath ‘Alī Āḥ^vondzāde. *Resāle-’e Īrād*. Azərbaycan Milli Elmlər Akademiyası, M. Füzuli adına Əlyazmalar İnstitutu, fond 2, s.v. 25 (Apx. 2, Г-19/420, инв. 606).
- Ахундов 1: М.Ф. Ахундов: *избранные философские произведения*. Ш.Ф. Мамедова (ред.), Баку, 1982.
- Ахундов 2: М.Ф. Ахундов: *комедии, проза, поэзия, литературно-критические статьи*. Надира Мамедова (ред.), Баку, 1987.

【二次文献】

- El²: *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12 vols., Leiden, 1960-2004.
- El¹: *Encyclopaedia Iranica*. Vols., London, 1982-.
- LN: *Loġat-nāme-’e Dehḡodā*. 15 vols., Tehrān, 1372-1373š.
- Ādamīyat, Farīdūn (1349š) *Andīše-hā-ye Mīrzā Fath ‘Alī Āḥ^vondzāde*. Tehrān.
- Amanat, Abbas (2012) Chapter 7: Legend, Legitimacy and Making a National Narrative in the Historiography of Qajar Iran (1785-1925). *Persian Historiography*. ed. by Charles Melville, London.
- Balayev, Aydın (2022) *Fərqli və ziddiyyətli M.F. Axundov: əqidəli rusofil, İran aşığı və “azərbaycanlı” kimliyinin təkanvericisi*. Bakı.
- Əlimirzəyev, Xəlil (2007) *M.F. Axundovun ideal və sənət dünyası*. Bakı.
- İbrahimov, Ağəmi & Mehri Məmmədova (2012) *Mīrzā Fətəli Axundzadə Arxivinin izahlı təsviri*. Bakı.
- Məmmədov, Zakir (2006) *Azərbaycan fəlsəfəsi tarixi*. Bakı.
- Parsinejad, Iraj (1988) *Mirza Fath Ali Akhunzadeh and Literary Criticism*. Tokyo.
- (tr.) (1990) *Mirza Fath 'Ali Akhunzadeh: a Literary Critic*. Piedmont.
- Zarrīnkūb, ‘Abd al-Ḥoseyn (1353š) *Az Şabā tā Nīmā. Na şarqī, na ġarbī – insānī: təcümī-’e-’e maqālāt, taḡqīqāt, naqd-hā, va namāyeş-vāre-hā*. Tehrān, 277-315.
- Гасымзаде, Ф.С. (1960) *XIX əsr Azərbaycan ədəbiyyatı tarixinə dair tədqiqlər*. Bakı.
- Гусейнов, Гейдар (1958) *Из истории общественной и философской мысли в Азербайджане XIX века*. Изд. 2-е, Баку.
- Мамедов, Надир (1982) *Реализм М.Ф. Ахундова: посвящается 170-летию со дня рождения М.Ф. Ахундова*. Баку.
- Рафили, М. (1957) *М.Ф. Ахундов: жизнь и творчество*. Баку.
- Рзаев, А.К. (1986) *Азербайджанские востоковеды XIX века*. Баку: Элм.

Тагизаде, Самир (1991) *Мирза Фатали Ахундов и Европа*. Баку.

ウルマン, マンフレッド (2022) 『イスラーム医学』 橋爪烈, 中島愛里奈 (訳), 青土社.

岡崎正孝 (1982) 「カーギャール朝史ペルシア語史料解題」『オリエント』 25-2, 74-87.

蒲生礼一 (訳) (1964) サアディー 『薔薇園——イラン中世の教養物語』 平凡社.

小牧昌平 (1992) 「19世紀初期のホラーサーン——初期のカーギャール朝についての一試論」『上智アジア学』 10, 17-42.

近藤信彰 (2023) 「近代イランにおけるテュルク的過去の参照」『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』 野田仁 (編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 107-120.

佐野東生 (2010) 『近代イラン知識人の系譜——タキーザーデ・その生涯とナショナリズム』 ミネルヴァ書房.

塩野崎信也 (2017) 『アゼルバイジャン人の創出——民族意識の形成とその基層』 京都大学学術出版会.

塩野崎信也 (2023) 「アーホンドザーデ——2つの民族の父」『中央ユーラシア文化事典』 小松久男ほか (編), 丸善出版, 186-187.

中田考 (監修) (2014) 『日亜対訳 クルアーン』 中田香織, 下村佳州紀 (訳), 作品社.

藤井守男 (1984) 「ミールザー・ファテ・アリー・アーホンド・ザーデ *Mīrzā Fath-‘Alī Ākhond-zāde* (1812~78) とイラン——文学史的側面から」『東京外国語大学論集』 34, 217-234.

藤井守男 (1986) 「アーホンド・ザーデ *Ākhond-zāde* (1812-78) に見る「イラン・ナショナリズム」の諸相」『オリエント』 29-2, 85-101.

守川知子 (2010) 「「イラン史」の誕生」『歴史学研究』 863, 12-21.

山本啓二, 矢野道雄 (訳) (2010-2013) 「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル=ビールーニー著『占星術教程の書』(1)~(3)」『イスラーム世界研究』 3-2, 303-371; 5-1/2, 299-356; 6, 467-539.

キーワード: ロシア帝国 イラン アゼルバイジャン 近代化 歴史叙述